

## 阿頼耶識

平川 彰



阿頼耶識あらいえしきは唯識佛教で、人格の主体を示す言葉です。「阿頼耶」は「アーラヤ」(alaya)の音訳語でして、「住所」という意味です。「蔵」と訳されています。即ち阿頼耶識を「蔵識」といいます。阿頼耶識は何を蔵しているかといえますと、「種子」を蔵しているのです。種子と言っても、植物の種子たねではないのでして、この場合の種子は善悪の行為が、あとに残した「見えない力」をいうのです。この力から結果が生ずるので、種子というのです。種子に

は名言種子みごころんと業種子とがありますが、ともかくこれらは「潜在的な力」でして、それが種子と呼ばれて阿頼耶識に蔵せられているのです。この種子は、因縁が合すると表面心と呼ばれ出されて「現行げんぎょう」となります。しかし心は刹那滅をくり返していますから、表面心の現行は刹那に形を変えて、再び種子となって、阿頼耶識に熏習くんじゆつをされます。この阿頼耶識の種子と、表面心の現行、さらにこれが種子に変わって阿頼耶識に熏習くんじゆつされることの三者の関係を「種

子生現行、現行熏種子、三法展轉因果同時」と言います。  
なお阿頼耶識に蔵せられている種子は無数にありますから、現行に現れない種子が沢山あります。これらの種子も刹那滅のものですから、この刹那に滅する在り方を「種子生種子」と言います。ともかく阿頼耶識が種子を蔵している点を「能蔵」と言います。

これにたいして表面心の現行が、阿頼耶識に種子を熏習する場合には、表面心が主となり、阿頼耶識は表面心から種子を受け入れるわけですから、この場合の阿頼耶識を「所蔵」と言います。

以上、阿頼耶識の「蔵」の意味には、能蔵と所蔵の意味がありますが、もう一つ「執蔵」の意味があります。これは「我<sup>が</sup>として執著されている」という意味です。阿頼耶識はわれわれの心の奥の「無意識の領域」に活動しています。われわれには阿頼耶識の活動はよく分りません。そのためわれわれは、心内の阿頼耶識を自己の「自我」と思い誤るのです。われわれが「自我である」と思っているものは、実際には自我ではなくて、阿頼耶識であるという意味です。

私共は漠然と「心の中に自我がある」と思っています。

しかしその自我はどんなものかと自己反省をしてみますと、自我は途端にほんやりとしたものになり、つかみどころがありません。「これが自我だ」とはつきりつかめるものが、心の中にあるわけではありません。唯識佛教で言えば、私共が自我だと思っているものは、実には阿頼耶識であるということです。しかし、阿頼耶識の主要部分となっている種子は、刹那滅で無常ですし、しかも種子は現行に変わって消滅します。さらに新しく種子が現行から作られて、阿頼耶識に熏習されますから、種子には増減があります。

このように阿頼耶識は無常でありまして、絶えず変化していますから固定的な実体ではありません。われわれの人格は生れてから死ぬまで、自己同一でつながっているようですが、しかし少しずつ変化していきます。その人格の主体の中心が阿頼耶識ですから、阿頼耶識はわれわれの執着している「自我」とは同じではありません。しかしわれわれは阿頼耶識を自己反省でつかんで、これを「自我と誤解」しているのです。この誤解し、執着している点を「執蔵」というのです。

われわれの認めている自我は漠然としていますが、しかし自我に対する執着は強固です。何故強固であるかといえ

ば、その執著が阿頼耶識に基づいているからです。

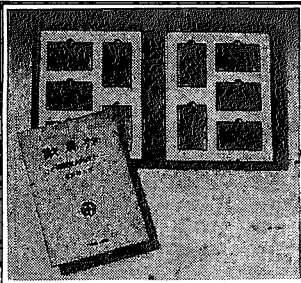
以上、阿頼耶識の「阿頼耶」すなわち「蔵」に、能蔵（種子を蔵している）・所蔵（現行から種子を熏じつけられる）・執蔵（自我と誤解される）の三義のあることを述べました。三種の蔵のうちでは、第三の執蔵が重視されますが、同時に能蔵の意味も重要です。これは現代風に言えば、われわれの潜在心（無意識の領域）に、遺伝や性格・記憶などが蔵せられていることを言っていると理解してよいと思います。遺伝・性格・記憶等は、無意識の領域にある限りでは、作用を現わさないので、それらが機会を得て表面心に現れると作用を現わすわけです。種子の中には、これらの作用のほかに、「運命」とも言うべき、「業の力」が含まれています。われわれがこの世に生れたということですから、自己の力ではどうすることもできないこととして、業の力に動かされているわけです。

ともかく阿頼耶識を蔵識という場合には、過去の心理的・生理的な力が変化して種子となり、ここにかくされているという意味です。次に阿頼耶識の成立について述べたいと思います。

阿頼耶識は人格の主体であります、そのはじまりはわ

れわれが母親の母胎に宿ったときです。これを「結生の識」といいます。生理学的に言えばわれわれのはじまりは、父親と母親の遺伝子が合体した受精卵が、母親の胎盤に受精卵した時にはじまりますが、しかし父親と母親との遺伝子だけで、われわれのはじまりが形成されるわけではありません。それでは自己が、父とも母とも異なる第三の独自の存在であることを主張することはできません。例えば一卵性双生児の二人は、顔付きも、考え方も区別ができない程によく似ています。しかし両者は別人でして、取りかえることもできませんし、どちらか一人有ればよいというものでもありません。彼等は異なった配偶者と結婚し、異なった子供を作り、別々の人生をたどります。すなわちたとい遺伝子はよく似ていても、両者の人生は違いますし、その運命も違います。

このように各人の運命が異なるのは、われわれのはじまりが、単に両親の遺伝子の合体だけにあるのではなくして、さらにこれに「或るもの」が加わっておくるからであります。唯識佛教で言えばこの「或るもの」とは阿頼耶識の種子であるということです。即ち人が臨終に至り、死がおおると、阿頼耶識の種子は一つのまとまりになり、その身体を



加藤辨三郎 講述  
**歎異抄**

親鸞聖人の教え  
カセットテープ全10巻  
(コマ文庫刊)

「歎異抄」は、現代人の必読の書という。これほど現代にアピールし、広く読まれている佛教書もまれだ。この「歎異抄」を、卓越した経営者であり、化学者であり、また在家佛教協会の創立以来理事長をつとめた講述者は、その清新な眼を通し、親鸞聖人の教えを、深く掘りさげて語りかけている。ここには、永遠のなかの現在において、生かされているわたしたちが、明るく浮き彫りされ、たとえ苦悩の世界にあっても、真実を失わない精神が脈々と響く。

歎異抄本文附  
附録 講述者揮毫色紙  
¥30,900 送料600

在家佛教協会  
東京都千代田区大手町1-6-1  
郵便番号100  
電話03-3214-5024 振替東京0-17765

離れ、次の生存を求めて去るのでして、この去るものを「種子の阿頼耶識」といいます。この種子の阿頼耶識が次の生存の生処を見つけて、父母の遺伝子と合体するところに、新しい生存がはじまると考えるのです。

このように前の生存から連続して来るのは種子の阿頼耶識ですが、これが父母の遺伝子と合体して、母親の母胎に託したものを、「現行の阿頼耶識」といいます。そして種子の阿頼耶識はその中に含まれるのです。故に現行の阿頼耶識は母胎に宿った時にはじまり、死において肉体が腐敗消滅する時に終わります。即ち種子の阿頼耶識が人間の母胎に託すれば、人間の現行の阿頼耶識ができます。そして人間として一生を生きるのです。しかし種子の阿頼耶識が、

犬の母胎に託すれば、犬の現行の阿頼耶識ができるのでして、犬として一生を生きることになります。

したがって何処に受胎するかということは大きな問題でありますが、次の生存の生処をきめることを「因轉變」(玄奘はこれを「因能変」と訳しています)といっています。そして実際に次の生存に生れることを「果轉變」(玄奘は「果能変」と訳しています)といっています。したがって父母の遺伝子と合体して、母胎の中に現行の阿頼耶識ができることは、果轉變(果能変)であるわけです。

因轉變は、阿頼耶識の中の種子(名言種子と業種子)が成熟することですが、その結果成立する果轉變は、三種の轉變といひまして、阿頼耶識が母胎に託する(阿頼耶識轉

変、これを異熟轉變といいますが) ことだけでなく、第七識の末那識の轉變(思量轉變)と、前六識の轉變(了別境轉變)との三種の轉變が同時に成立します。即ち現行の阿頼耶識が母胎に託したとき、同時に第七識の末那識と、前六識、すなわち眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五識と第六識の意識もすでに成立しているというのです。このように現行の阿頼耶識は一生つづくだけですが、その中心となっている種子の阿頼耶識は前世からつながっているものです。この種子の阿頼耶識の立場で、阿頼耶識は輪廻の主体であるというのです。

唯識佛教では、われわれの心の活動を八識に分けて説明しますが、これらの八識は阿頼耶識が母胎に託するとき、同時に成立していると見るのです。そして八識のうち第七の末那識と意識等の六識とを合して「轉識」といって、心の表面の活動を行う識といいます。即ち「種子生現行」の「現行」は、これらの七識の認識界をいいます。これらの七識は現行の阿頼耶識(第八識)に蔵せられている「種子」から現われるのです。

唯識佛教の「唯識」ということは、この七識と阿頼耶識との相互関係で説明するのですが、その説明は別の機会に

ゆずります。ここにはもう少し阿頼耶識について説明します。

阿頼耶識は因轉變、すなわち名言種子と業種子が熟した結果生じたもの(果轉變)でありますが、しかしこれは前世の善悪業の果報でありますので、阿頼耶識を「異熟識」ともいいます。さらに無限の過去世からの一切の種子を所有していますから「一切種子識」とも言います。

過去世の善悪業の結果のことを「異熟果」といいますが、阿頼耶識は善悪業の果報でありますので「異熟識」といいます。私共が持つて生れた智力・体力、その他の能力は生れることによって与えられたものですので異熟果といえます。そして広い意味では、肉体や環境までも含めて阿頼耶識といえます。例えば肉体が生きているのは、阿頼耶識が二十四時間目覚めていて、肉体を生かしているからです。意識や末那識は気絶や滅尽などにおいては活動しなくなりますので、生命を維持する主体にはなり得ないのでして、阿頼耶識だけが、生命的・心理的・精神的諸活動を統括し、支配する力があるのです。阿頼耶識については、まだまだ多くを説き残していますが、今回はこれで終わりにします。